

創作オペレッタ活動

33年の軌跡とその教育的意義

北村 恵子
Kitamura Keiko

I. はじめに

創作オペレッタ活動を短期大学幼児教育学科の授業に取り入れてから、既に33年が経過した。その間、授業形態や発表スタイルに変化があったものの、一度も途切れることなく継続してきたことに、我ながら驚きを禁じ得ない。

今回『見つめる』が刊行されることになったのを契機に、今までの実践を纏めることとし、その教育的意義について論述したい。

また、本学で創作オペレッタを経験して卒業した者たちが、就職先の幼児教育の現場や障害者施設でも、その経験を生かして同様に実践した報告も多く届くなど、学生時代の楽しかった経験を職場で再度みんなと分かち合いたいという心意気が伝わってきて、改めてこの活動の意義を再確認しているところである。

その他にも、創作オペレッタ活動として筆者が非常勤で関わってきた保健師学科や歯科衛生士学科、看護専門学校などでの実践、社会人の生涯学習としての実践、共同研究者との小学校低学年・高学年での実践、中学校での実践などについても併記したい。

II. 創作オペレッタ導入について

創作オペレッタを授業に取り入れたのは1974年が最初であったが、授業で出来上がった作品を発表会の形で外部に紹介したのは1975年からで

ある。

当時「幼児音楽」という科目名で授業を担当していたが、筆者は予てから「創作オペレッタのような総合活動は、音楽能力だけでなく他の様々な能力をも伸長する活動である」ことを主張していた。たまたま、NHKの歌のおばさんとして名高かった松田トシ氏が本学の副学長に就任し、筆者の主張に深い理解を示したことから、創作オペレッタの活動が始まったという経緯がある。

当時の教育界においては、現在の様に「総合的な学習」などという考え方はまだなく、担当科目の「幼児音楽」では、ピアノや歌の技術に長けていることが幼児教育者となるための必須条件として求められていた。他短期大学の同じ様な科目を担当していた教員からは、何故その様な活動をしているのか、それはクラブ活動や学校祭で特別に行えばいいのではないかと、授業でそんなことに時間を使って学生たちの音楽能力が本当に育つのか等と、理解を得るのが大変な状態であった。

この様な時代にあっても筆者は信念を持ってこの活動を続け、それを数多くの論文に認め、且つ、その主張を学会発表等においても意欲的に発表し続けた（註1）。

現在では、筆者の論文を引用する研究者も数多く現れ、先駆的な活動であったことが証明されている（註2）。

Ⅲ. 創作オペレッタの実践記録および概要

1. 幼児教育学科

幼児教育学科における授業での創作オペレッタ活動は、担当科目名が「幼児音楽」、「音楽リズム」、「音楽表現」、「音楽表現指導法」へと変化した中でも継続されてきた。また、カリキュラムの変更等の関係で、筆者の担当科目が2年間必修の時代を経て、1年生は必修で2年生は選択、さらに、1年生のみの必修となり2年生にはその科目は開設されない等、授業形態にも様々な変化が起こった。そして、当初行われていた45分で30回の授

業形態も、90分一コマで15回の形になったが、それらが変化する度に、授業内容の精査と授業方法への工夫が求められた。

また、2001年からの創作オペレッタの活動は「音楽表現指導法」の授業枠ではなく、それをやりたい学生が「卒業研究」枠で活動することとなったが、その後も学生たちのやりたい気持ちに押される様に、創作オペレッタの実践は毎年途切れることなく続けられて現在に至っている。

前述の様な変化に対応してこの活動の実施形態も変更されたが、それは以下に記述する通り、大きく見てⅣ期に分けることが出来る。

ここでは、発表された創作オペレッタの作品名を挙げてみたい。

第Ⅰ期……上田市民会館での発表

授業では、当時の2年生全員が8グループに分かれて創作オペレッタを作った。そして、学内での発表会を経て、その中から外部の人の目に適う作品を学生たちが投票で選択し、上田市民会館で全員が加わって発表するというスタイルが定着した。

当初の発表会はⅠ部…ピアノ・声楽・合唱等の発表、Ⅱ部…創作オペレッタ、Ⅲ部…創作舞踊で構成された「音楽の会」で、幼児教育学科の行事の形で全教職員が関わり、その日は休講措置が取られ実施された。

創作オペレッタは第3回「音楽の会」から外部発表が開始されている。

1975年……小僧と鬼婆

1976年……こぶとりじいさん・くしゃみくしゃみ天の恵み

1977年……きき耳頭巾・のみこみとつつあ

1978年……ねずみの嫁入り・おんちよろちよろ

1979年……オズの魔法使い・裸の王様

1980年……孫悟空・乞食のくれたてぬぐい

1981年……ピーターパン・オニの子“ブン”

1982年……長くつ下のピizzi・若草物語

1983年……アイ・金のがちょう

1984年……舌喰い池・ありがてーありがてー

1985年……すてきな贈り物・夏に降った雪

- 1986年……二人のお姫様・ふたり石
- 1987年……白雪姫の大冒険・カッパの夢
- 1988年……アン物語・人形からのメッセージ
- 1989年……ピーターとセレーネ・サヨの星

第Ⅱ期……体育館での発表

「音楽表現作品発表会」の名称で2年生が体育館で創作オペレッタを発表し、観客として附属幼稚園3, 4, 5歳児全員が招待された。また、短期大学の1, 2年生全員が観劇し、平日授業ではあったが、発表の時間は休講措置が取られた。内容は「音楽表現作品発表会」という名称の通り、創作オペレッタの他にも様々な音楽のつく作品が発表されたが、今論文では創作オペレッタのみの記述とした。

- 1990年……虹色の冒険
- 1991年……大きなかぶ・不思議な国のアリス
- 1992年……赤ずきんちゃん
- 1993年……狼と七匹の子やぎ
- 1994年……白雪姫
- 1995年……オズの魔法使い
- 1996年……長靴をはいたネコ
- 1997年……不思議な国のアリス

第Ⅲ期……北野講堂での発表

第Ⅱ期までは「音楽表現作品発表会」の名称で2年生が体育館で発表していたが、北野講堂が竣工されたため、そこでの発表会となった。観客として附属幼稚園の3, 4, 5歳児全員が招待された。また、この時は幼児教育学科2年生の選択授業枠での活動であったが、数名を除いて殆どの学生が選択したため、2年生の該当時間は休講措置が取られた。また、2001年からは卒業研究枠での活動となったため、創作オペレッタ活動をしたい学生が北村ゼミに所属しての初めての発表となった。

- 1998年……ピーターパン
- 1999年……おおかみと七匹のこやぎ

2000年……ヘンゼルとグレーテル

2001年……赤ずきんちゃん

第Ⅳ期……地域に出での発表

短期大学で創作オペレッタを実践していることを聞きつけた地域の方々から、学内だけでなく地域の子どものために公演して欲しいとの依頼があり、それに応えて小県郡真田町での公演が実現した。

これは、「蒔人の会」というグループからの依頼であり、会場設定や集客を引き受けるので、学生たちは創作オペレッタを演ずることに集中して欲しいという申し出であった。第一回目は真田町教育委員会の後援で、傍陽小学校での公演が実現した。

また、東御市での公演にはNPO法人「未来広場」が関わって下さり、東御市教育委員会の後援で実施された。

① 真田町での公演

2002年……君の後ろの黒い影（傍陽小学校体育館）

2003年……夢の種—その花を咲かせるために（菅平リゾートセンター）

2004年……ともだちのわっか（傍陽保育園・子育て支援センターホール）

② 東御市での公演

2005年……元気いっぱい大作戦（東御市中央公民館ホール）

2006年……きれいのヒミツ（東御市和コミュニティーセンター）

2007年……おもちゃのきもち（東御市和コミュニティーセンター）

2. 幼児教育学科卒業生

上田女子短期大学で創作オペレッタを経験して卒業した人たちから、就職先の幼児教育現場や各種施設等で、子どもたちや利用者の方たちと創作オペレッタ活動をしているという報告が多数寄せられるようになった。学生時代に自分たちが夢中になって活動した楽しかった思いを、職場においても共有出来ないかという気持ちから実践したというのが殆どである。

① 幼児教育の現場で

現在の幼児教育現場では、生活発表会やお楽しみ会といった、保護者を園に招いての行事を計画するところが多く見られる。

卒業生が創作オペレッタを実践したという報告の中には、そうした発表会等に3歳児、4歳児、5歳児で試みた事例も多く寄せられたが、特に4、5歳児と共に作り上げた例が顕著であった。また、3歳児で試みたが、発表という形で人に見てもらうのにはまだハードルが高く難しかったというものもあった。しかし、発表会の経験の多い園では、年少児が年中・年長児の発表に憧れ、やりたい気持ちが育成されている園もあり、園側の考え方にもよって、子どもたちのプラスになる方法で無理なく実施されているものも見られたが、中には、善し悪しを考えるまでもなく、とに角保護者に向けて子どもの現状を認識して貰うために発表会を持つといった例もあるようだ。卒業生の報告からは、様々な園の考え方によって、自分が学生時代の楽しかった思いを子どもたちと共有することが出来満足した者もいれば、実践に困難さを感じている者もいるという実情が浮かび上がっている。

ともあれ、学生時代に心揺さぶられる体験として創作オペレッタ活動が位置づいていたことが、現場での活動に繋がる可能性が大きかったと考えることが出来る。即ち、幼児教育者養成校における創作オペレッタ活動の経験が、教育として生きていたと言えるのではないだろうか。

② 施設の現場で

初期の卒業生から「学生時代に体験した創作オペレッタを、勤務先の知的障がいを持つ利用者さんたちと作りたいのですが、アドバイスして頂けませんか？」という相談を受け、個々の障がいの程度に応じて役割分担を加減した創作オペレッタを筆者と共に作ったことが、施設での創作オペレッタ作りの最初の事例であった。その後、同様な報告が徐々に増えてきたことは、学生時代の創作オペレッタの体験がそうさせていることを実感出来る。この様な活動では、施設利用者の個々の障がいの状態に合わせて創作オペレッタが作られるが、これは、教育として特筆に値するものであろう。

3. その他

① 保健師学科・歯科衛生士学科

保健師学科と歯科衛生士学科は、長野県立公衆衛生専門学校に設置されている2学科である。保健師学科では、看護専門学校の3年を終了した後に、保健師資格と養護教諭資格を1年間で取得出来る。また、歯科衛生士学科では、高等学校を卒業した後に、歯科衛生士資格を2年間で取得出来る。筆者は非常勤として2学科の一般教育「音楽」を担当しているが、ここでも、メインは創作オペレッタの活動をしている。

保健師学科の「音楽」で創作オペレッタ活動を開始したのは1985年からであるが、後に、その内容を創作オペレッタをすることに限定して「音楽表現」という科目名に変更され、現在では集中講義で創作および発表会を行い、保健師や養護教諭になった現場でも利用出来るような体験をして貰っている。創作されるオペレッタの題材は、保健師や養護教諭の卵としての視点から選定されたものが多く、時宜を得たタイムリーな話題を選び、楽しそうに創作活動や発表体験をしている。また、その経験を生かし、就職先の市町村等で保健活動をする時の媒体にしたり、地域の住民を巻き込んで創作オペレッタを作り演じたりし、地域保健指導に効力を発揮した例も多数報告されている。因みに、保健師学科では毎年3作品が創作されており、現在までに69作品が創出されている。

歯科衛生士学科での「音楽」は、2年生で15コマが設定されているが、ここでの創作オペレッタは「音楽」だけでなく、専門科目の「保健指導」の時間との共同授業として実施されている。即ち、「保健指導」で行われていた保育園での集団歯科保健指導実習において、「音楽」の時間で作った創作オペレッタを発表し、その後、園児たちにブラッシング指導をするというスタイルである。ここで創作されるのは毎年3、4、5歳児対象の3作品であり、事前に「保健指導」の時間で子どもたちとの交流をして、その発達過程を確認した上で創作しているので、子どもたちもとても楽しみにそれを待っている。また、発表体験をした学生たちからは、グループ活動の意義、専門性の向上、子どもたちの発達過程の理解、表現力の伸

長、表現媒体の音楽が子どもたちに与える影響の理解等について、集中して楽しい意義のある活動であったとの、全員からのコメントが毎年寄せられている。なお、「保健指導」と「音楽」の共同授業は1997年から実施されているが、オペレッタ創作数は毎年3作品ずつ出来るので、それ以前の創作数を除くとして、本年までに33作品を数えている（註3）。

② 看護専門学校

S看護専門学校は、看護師を養成する為の2年課程と3年課程を持つ県立の学校であり、筆者は3年課程の2年生を指導している。前述の公衆衛生専門学校での創作オペレッタ活動と同じ授業をして欲しいとの依頼で、1994年よりこの「音楽」の授業が開始されたので、「音楽」イコール創作オペレッタ活動であり、本年で14年を経過した。創作される作品のテーマは、一般社会における様々な問題を看護学生の視点から捉えた題材を元にしており、毎年3グループの作品が発表されるので、今までに41作品が創作されている。何れも、自分たちが相手に伝達したいテーマが選定されるため、テーマの掘り下げにより、より深い洞察力の育成と専門性が深化される活動となっている。発表を体験した学生たちからは、グループ活動の意義、意図したテーマが観客に受け入れられた時の感動体験、表現力の伸長、音楽能力や技術の伸長等、創作オペレッタ活動の多大な効果が挙げられている（註4）。

③ 社会人の生涯学習

社会人の生涯学習の位置づけで行われた創作オペレッタには、1993年実施の「育児シンフォニー～かがやけ子育て～」および、1994年実施の「どう白書…いつか誰かを愛する君へ…」が挙げられる。

前者は、母子保健家族計画全国大会「明日を築く、今日の子育て」が長野県松本市で開催された折に、長野県北信地域の保健師たちが自作自演した発表作品で、筆者が全体指導と作曲・ピアノ伴奏を担当したものである。今まで保健師たちによる創作オペレッタは上演されたことはなく、全国大会初の試みとして注目を集め、この発表作品はかなり評判が良く新聞の全国紙に大きく取り上げられたりしたが、何よりも効果的だったのは、創作

オペレッタに関わった多くの人たちにとって、生涯学習として意義深かったことである。これは県主導で計画されたので、上司に命令されて参加した人も多かった様だが、出演者選考基準が、前述の長野県公衆衛生専門学校を卒業し、創作オペレッタを経験した者を中心とする、というものであったため、約73%がその該当者であった点が注目される。学生時代に創作オペレッタを効果的な学習方法と捉えた人たちにとって、保健師として現場に出てから再びこの様な活動に参加出来たことは、生涯学習として有効であったことが理解出来る。

後者は、長野県・長野県教育委員会・エイズ予防財団の主催による「エイズ予防ウィーク in NAGANO…エイズはみんなの問題 主役はあなた」講演会が、東部町文化会館サンテラスホールで開催された折に、東部町役場職員、東部町健康管理委員、上田女子短期大学学生、上田保健所職員たちが自作自演した創作オペレッタで、筆者が全体指導と作曲・ピアノ伴奏を担当したものである。この創作オペレッタの様な表現方法の有効性は、公演後に多くの人たちから寄せられた大変好意的な評価に証明されたが、それにも増して効果的だったのは、地域に深く根差した活動になり得たことである。日頃は接点のない地域の方々や、学生および役場職員、保健所職員との密なる交流が可能となり、正に生涯学習としての意義があったものと言えよう。

④ 小学校…低学年・高学年

創作オペレッタについて筆者と共同研究をしている中村礼子は、長野県の小学校音楽専科教師である。ここでは、中村の実践した小学校低学年・高学年での実践について、筆者と共同執筆した論文から記述したい(註5)。

2002年4月から実施された新小中学校学習指導要領についての教育課程審議会の改善基本的視点は、「生きる力の育成」および「総合的な学習の時間」をキーワードとしたものであったが、中村はその趣旨に基づいて小学校2年生でのオペレッタ活動「泣いた赤おに」を実践し、それに分析考察を試みている。これは正に、各学校の創意工夫による特色ある教育活動の例であり、特色ある学校作りが進められる様な「総合的な学習の時間」

を設けた文部科学省の意図に合致するものであった。「総合的な学習」は3年生から実施となっているが、2年生における実践でも充実した内容となった。

また、高学年における実践では「龍が淵のはなし」が挙げられる。これは地域の昔話を取り上げてオペレッタに仕上げた、5年生による活動である。中村は、小学校でオペレッタ活動が意味を持つ内容になるかどうかについて、作品・子ども・学級担任・音楽的内容・教師の基本姿勢の5つをキーワードとして仮説検証しているが、高学年になると心理的に人前で演じたり表現することに抵抗感が芽生える時期と重なるので、オペレッタ活動が難しくなるのではないかという意見に対して、先の5条件をクリアすれば可能性があることを実証した。

⑤ 中学校

筆者が関わった中学校の創作オペレッタでは、愛媛県松山市の城西中学校の「道後温泉玉の石」の例がある。それは、筆者が松山市教育委員会からの依頼を受けて、中学校音楽専科教員のための講習会を行った際に指導した中学校である。そして、この作品は、愛媛県の音楽教育研究大会の折に発表された創作オペレッタで、公演したのは中学2、3年生の音楽選択生である。但し、作曲はプロに依頼したもので、演奏と演技は中学生が担当して発表したものである。参加した中学生たちは「大変だったがやりがいがあり楽しかった、出演者全員が仲良くなった」と、グループ活動の良さ、目標に向かって頑張ってやり遂げた達成感を述べてくれた。これらの経験は、彼らにとって将来における大きな自信に繋がるものと考えられる。

IV. 創作オペレッタ活動の教育的意義

授業での創作オペレッタ活動実践に当たっては、その目的やねらいの設定について熟慮を重ねるのが常であるが、何時も学生たちの反応に勇気づけられて継続してきた感がある。

これらの実践において、学生たちが何故大きく成長するのか、何がそう

させるのかについて学会発表を重ね、また、幾つかの論文に纏め、その教育的意義について自分の考え方や手法を他者に問うてきた。

ここでは、それらの論文等から、創作オペレッタ活動の教育的意義について、8の観点から述べてみたい。

1. 保育者の資質を高める音楽教育の観点から

保育者養成校の教育のねらいとして、専門性を一定水準まで身につけさせること、人間形成・人格形成をすること、問題を見つけ出しそれを解決していく力や研究心を養うこと等が挙げられよう。しかし、実際にはカリキュラムの過密化、科目間の相互関係の希薄さ等のため、幼児教育・保育を一貫した流れで把握出来なかったり、重複や欠落も見られ、何かとても不十分な感じを教師側も学生側も持っていた。

音楽教育においても同様で、2年という短期間で保育者としての資質を如何に養い、音楽能力をどうつけさせるかが、保育者養成校での問題であった。

この様な状況を鑑みて創作オペレッタを教育に導入したのであるが、それは、創作オペレッタの持つ総合性に着目し、その高度な総合芸術としての諸要素の研磨による技術力向上と共に、グループ活動による人間性陶冶や、目的に向かって自ら内在する力を引き出す活動として教育に位置づけることを目的としたものである。さらに、幼児の活動が総合的なものであることを意識し、その姿を見守り育てる姿勢を養成するためには、保育者養成校においても同様な姿勢が求められるのではないだろうか。即ち、学生の主体的な活動を見守り育てる指導者の存在が必要となるからである。

実際、学生個々の能力は計り知れず、創作オペレッタ活動の様々な総合活動の中で自分の能力を精一杯表出し、それを上手に生かしている。何かを見つけ出し熱中し悩み感う様な体験、そして、苦勞して創り出したものに感動する心情や、友人との人間関係を通して養われる人格形成、保育者としての資質の向上、音楽などへの興味関心や基礎能力の向上、造形表現始め他教科との連携とその能力の伸長、そして、学外へ出での発表会を持

つ事により、周囲への細かい常識的処置の経験を通して社会との繋がりを
持てる事、また、卒業してからのアフターケア（卒業してからも母校の
発表会に強い関心を持ち、教員や在校生との交流が出来る素地という意味
も含めて）、その他の理由から、教材として創作オペレッタを取り上げる
価値が充分あるものと考えられる。

幼児は、自分の見つけたことを全身で自己表出し、あそび込むことによっ
て様々な能力が育つと言われており、保育者がそれを見守り育てることが
必要な様に、養成校側でも学生の捉えた教材や方法論による活動を見守り、
彼女らが表現し易い環境作りを心掛ける姿勢が求められているものと言え
よう。幼児期の子どもを見とるためには、その人間を全人格として丸ごと
捉えることの出来る保育者の存在が必要である。とすれば、学生を丸ごと
捉える教材があつて然るべきと考えられる。その意味で、総合活動として
創作オペレッタを教材として取り上げてきたことを意義づけることが出来
る。さらに、この活動は音楽教育としてもその能力を大いに伸長するもの
であったことを付言しておきたい（註6）。

2. 創造的音楽学習の観点から

外国では1960年に入ってから既に創造的音楽学習の教育方法が考えら
れ始めていたが、我が国においては1970年頃から同様の考え方をする
人々が出てきた。この考え方や手法は、筆者が1975年から手がけてきた
創造的音楽活動と極めて類似している。この考え方が我が国の音楽教育界
に浸透し始めた契機にジョン・ペインターら（英）著の「SOUND AND
SILENCE」（1970）がある。その邦訳「音楽の語るもの」（1982 音楽之友社）
が出版されたが、筆者の実践に遅れること7年である。筆者は「音楽の語
るもの」で初めて創造的音楽学習を知ったが、筆者が1975年から実践し
ていた教育方法は、創造的音楽学習そのものであった。

創造的音楽学習の根底に流れる考えは、簡単に言えば「主体の個が自ら
表現し、創造し得る音楽でなくてはならない」というものである。この考
え方によれば、子どもの受容を前提としての音楽教育では不可能であった

もの、換言すれば、従来それによって失われていたものが息を吹き返し、今まで見えなかったものが見えてくるという結果を生み出すことになった。即ち、音楽的経験や音を探求していく過程で、個を認め、個が主体的に音楽に取り組むことによって自己変革をし、創造性を養うことで、従来音楽教育が子どもから奪ってきたものを、本来の状態に戻すだけのことであるとも言える。

さて、創造的音楽学習の考え方は、対象が幼児であっても学生であっても共通するものであるが、幼児教育の現場では“学習”という言葉は使わないのが通例である。そこで筆者は、これを創造的音楽表現活動と言うことにしている。

人間として生きる力を育てることや、豊かな生活に向けての開発をすることが教育の目的とするならば、音楽教育では人間として生きることに関わる自己表現意欲や自己表現本能を開発し、自己とは何かの命題に深く関わりながら自己実現していく力を、音や音楽を媒体として育てていく事になると解釈出来る。感覚を通して得られた心情が自己表現欲となり、表現したいという内的な燃焼の極地で表現は創造的必然を持つものであるから、その心の動きを音や音楽を通して自己表出する力を開発する事が、創造性を養っていく事に繋がっていくものと考えられる。そして、表現されたものは客観化された事にもなり、それがさらに自己理解に繋がり、生きる力の再創造源となって、生きることへの意味が確立されていく。この様に、音楽教育を人間の生きることとの関わりの観点から見れば、それは、人間生活の幅広い経験の一部と考える事が出来、したがって、多様な価値観の中での認識活動を基礎にし、総合的な表現活動として捉える音楽教育の存在に価値を見出す事が出来る。この様な創造的音楽表現活動は、従来からの狭い音楽観に捉われることなく、人間として生きることと常に相対し、総合的見地からその活動がなされなければならないと考えられる。それを可能にしていくためには、表現活動が創造的必然を持つ様な環境設定が必要である。それには、ものごとに当たって鋭敏に感じ取ることの出来る感覚と、それを認識することの出来る心情の育成が、まず第一に重要となる。

音楽教育においても、音や音楽、または、音や音楽と他のメディアと結びついたものをまず音楽と捉える感覚が求められるが、それには、音や音楽に興味を持つような環境を整えることが大切であり、その感覚の育成は幼児期に殊に活発に行われる必要がある。

さて前述の様に、本学の創作オペレッタの活動は、創造的音楽学習（創造的音楽表現活動）の考え方に基づいて始められた。授業での具体的実践項目は①表現あそび創作 ②創作楽器 ③合奏曲編曲 ④音探し ⑤人形劇創作 ⑥創作オペレッタ、である。勿論、第一に創造的音楽表現活動の考え方を伝えることを皮切りに、様々な感覚を養うための時間を多く取り、過去の音楽教育での一方的な先入観をそぎ落とすことからそれは開始される。その結果、彼女たちには、音楽活動が音楽のみに縛られたものではなく「ここでは何をしても自由である」との意識が喚起されるため、創作オペレッタ活動においても、以前に比べて遥かに素晴らしい発想や創造性が発揮されている（註7）。

3. ドラマ教育の観点から

今まで、創作オペレッタの活動を創造的音楽学習（創造的音楽表現活動）の観点から論述してきたが、“この様な劇表現活動が、何故彼女らを音楽的にも人間的にも素晴らしく変容させていくのだろうか？”についての研究を開始してから、ドラマ教育に行き当たった。

創造的音楽学習とドラマ教育の両方を研究すればする程、両者の考え方の類似点が多いという感触を持つに至ったが、1989年の訪豪の折のドラマ教育と創造的音楽学習の視察とワークショップを体験して、その近似と支え合いを実感することが出来た。

なお、その折の体験を基に、我が国で導入された「創造的音楽学習」が、実は前述のドラマ教育に触発されて生まれたものであることを、ジョン・ペインターらが原著「SOUND AND SILENCE」に既に述べているという事実について、筆者が我が国で初めて発見し、1990年の日本音楽教育学会で発表した。詳細は省くが、「SOUND AND SILENCE」が「音楽の語

るもの」として和訳された時に、クリエイティブ・ドラマが創造的演劇と誤訳されたことを発端として、音楽教育界にも細かい様々な言葉と内容の誤解が生じ、暫く混乱が続いた（註8）。しかし現在では、創造的音楽学習自体についての検証もされ、そういった喧騒は落ち着いている。

さて、ドラマ教育とは演劇教育で用いられる言葉の一つであり、それは、教育の場において演劇の様々な要素を使い「シミュレーション」という安全な枠の中で、ある時は他人として、またある時は自分自身として、創造力をフルに使いその場を演じ生きる経験を通し、人間の生き方の多様性と本質の何であるかといった世界観を正しく感覚していくための教育方法である（註9）。外国から入ってきたこのドラマ教育という言葉は、我が国で一般的に使われているテレビや映画のドラマという言葉とは、その概念や内容の異なるものである。それは、従来の演劇教育を、人間教育としてのドラマ教育と芸術教育としてのシアター教育の二つに分け、それぞれの教育的価値を明確にしたものである。ドラマ教育（Drama In Education）はクリエイティブ・ドラマ（Creative Drama）または単にドラマ（Drama）と呼ばれ、人に見せることを目的とせず個々の活動経験に重点を置き、そのプロセスを重視しているので、観客は必要ない。一方、シアター教育（Theatre In Education）は人に見せることを目的にし、上演が最終目的で芸術活動として高いものを目指している。したがって、必ず観客を必要としている。また、この二つは反対の概念を示すものではなく、多くの点で重複もしている。

これによると、幼児の劇活動はドラマ教育の範疇に入り、本学の創作オペレッタ活動はシアター教育の範疇に入るものと考えられる。しかし、本学学生であっても、ドラマ教育の過程を充分経験してからシアター教育、即ち、発表会に向けて芸術性を高めていくという手法が取られるため、両者を総合して様々な能力の伸長を目指しているものと言えよう（註10）。

4. 幼児の劇表現活動の観点から

創作オペレッタ活動は音楽を伴う劇表現活動であるが、ここでは、幼児

の劇表現活動に焦点を当てて述べたい。

幼児教育の現場では、様々な名称の保護者を対象とした発表会が存在する。調査によれば（註11）、幼稚園、保育園共、このような発表会に約8割の先生方が肯定的意見を持っていた。その内容は、話の世界や自分の体験を自分なりのイメージで表現し、自分ではない役になりきって演じる楽しさを味わう大切さ、大勢で会話を共有する嬉しさ、会話を作り出していく様、精一杯やり遂げた後の満足感、あなたと私の関係が出来た時から劇ごっここの威力が出る、無理なく自然な形でごっこあそびから劇ごっこへと発展出来る様な援助と環境設定が大切であるとか、また、劇ごっこの仲間意識は「人間関係」、セリフを言うのは「言葉」、あそびに必要な衣装や音を作るのは「表現」、あそびが展開し易い環境設定は「環境」、元気にごっこあそびをするのは「健康」で、発達の視点が沢多く含まれている等である。

一方、疑問を感じている先生方は約2割で、その内容は、見映えの良さ・保護者対象の劇や発表が多い様だが、誰のため何のためなのか日々疑問を抱いている、過程が大事と言いつつも発表となるとつい強制が入る、教師の得手不得手が発表を左右する、発表会や行事が先に決まっていると、子どもを引っ張って行かざるを得ない、20代の若い先生はごっこあそびの見方が理解不足である、発表のための劇あそびは発表が終わると終わりになる等であった。

これらを分析すると、子どもたちの劇ごっこや劇形式活動は、総合活動としてその成長や育ちに大いに機能するものと位置づけられ、頭では理解出来ているものの、“人に見せる”という観点からは、見せるために演ずる発表会の影響から脱却出来る園が多いとは言えず、肯定的意見を持ちながらも疑問も持ち続けている者が多いことも分かってきた。発表すること、即ち、人に見せることは、子どもたちの内的高まりから発したものであることが重要条件であり、見せるために作られた活動は子どもたちの育ちの上からは害になることすらある。この点、現場の先生たちの悩みはかなり大きいものがある。しかし、子どもたちへのプレッシャーの影響の他、保護者の無理解もあり皮肉である。即ち、我が子ばかりに目が行き、他の子

との比較や担任の先生への批判等に陥りやすいことも指摘されている。

これらについては、前述したドラマ教育とシアター教育の考え方で整理すると理解し易い。即ち、幼児の「発表会」において、人前で発表するというプレッシャーを与えるべき年齢かどうかのポイントである。諸外国では、小学校高学年位まではドラマ教育の範疇で活動し、人前で発表するプレッシャーは避けなければならないものとされている。しかし、我が国ではこの様な考え方がされているとは言い難く、子どもたちには無理な発表を強いることも多く見られる。但し、子どもたちが、創った作品が他者にどの様に伝わるか確認したい時には、内々の見せ合いが必要となることもあるだろう。

以上、子どもたちの劇ごっこの様な表現活動はについて述べてきたが、それらは総合的なものであり、子どもたちの発達や育ちになくってはならないものであるという認識が、多くの幼児教育関係者の一致する考えであること、また、そのために発表会を含めた諸行事の見直しが必要なこと等が確認された。今後は劇ごっただけでなく、子どもたちの自由で伸びやかな総ての表現活動が保証され、幼児期に育てたい諸要素が総合的視点から育成される様な幼児教育現場の出現が期待される（註12）。

5. 地域と関わる活動の観点から

短期大学幼児教育学科での音楽授業で、創作オペレッタ活動を長い間実践してきたが、2002年には地域と関わる創作オペレッタ公演が初めて実現した。これは、創作オペレッタ活動が卒業研究での実践になってから3年目のことであり、Ⅲの(1)の第Ⅳ期に当たる。

そもそも幼児教育では、人間の育ちを総合的に見守り援助することが肝要であるが、幼児の総合的な活動の中から音楽のみを抽出して、その技術を学生たちに教育することの多大なる困難さを、過去には常に感じていた。そこで、幼児の総合的な育ちを丸ごと見とり受け入れ、人間としての育ちに必要な諸要素を総合的に捉えた上で、その育ちを援助するための技術を総合的に把握出来る学生を育てたいとの目標を立て、創作オペレッタの授

業を継続してきたという経緯がある。幼児を総合的に見守ることの出来る学生を育てるには、学生を総合的に見守るための教材、即ち、創作オペレッタの様な総合活動が有効であると考えたからである。この実践の結果、学生たちには幼児を総合的に見とる視点が育成されたものと自負している。

さて、上田女子短期大学の創作オペレッタ活動を伝え聞いた、真田町に居住するグループが、「是非地域に出向いて、子どもたちのために発表して欲しい」と申し出てきたのをきっかけに、地域と関わる創作オペレッタ公演が実現した。

その後、招聘を希望するグループと北村ゼミナールの学生たちとの話し合いの時間を設けた結果、公演は11月末に行うこと、会場は傍陽小学校体育館、対象は幼児と小学校低学年、真田町教育委員会が後援、広報は招聘グループが担当、チラシとプログラムは北村ゼミナールが準備するといった概要が決められた。真田町での第一回目は傍陽小学校で、第二回目は菅平小・中学校の協力を得て菅平リゾートセンターで、第三回目は傍陽保育園での公演が実現したが、何れも真田町教育委員会の後援が得られた。

真田町における3年間の公演に際しては、北村ゼミナールの学生たちと地域の幼児教育に携わる方々や一般社会の関係者との複数回の打ち合わせ等を通して、お互いに密なる交流が可能となり、学生たちにとっては社会人との接触という貴重な場を経験出来た。また、地域に育つ子どもたちと関わりを持つことが出来、発表という緊張した真剣勝負の機会を経験したことは、彼女らの専門性を高めるための大いなる刺激になったものと考えられる。

元来、学生たちの個々の能力には計り知れないものがあり、創作オペレッタの様な総合活動の中で自分の能力を精一杯表出し、仲間との関係の中でそれを巧みに生かし、共に活動する中で驚くほどの成長の姿が見られる。創作オペレッタは、何かを見つけ出し熱中し悩み惑う様な経験をし、苦勞して作り出したものに感動する心情の育成や、友人との人間関係を通して養われる人格形成、保育者としての資質向上、音楽などへの興味関心や基礎力向上、また、他領域教科との連携やその力の向上などの教育的効果が

実証されているが（註13）、学外に出での公演の形で地域の方々と関わりを持てたことは、彼女らの能力伸長に大いに寄与したことで特筆に価する。それは、計り知れない成長の場であった。即ち、周囲への細かい常識的処置の経験を通して実社会との繋がりが持て、一般社会における礼儀・規律・常識といった、学生の立場では分からなかった様々な社会的要素の必要性を理解し、失敗しながらもそれに対応する智慧を働かせ、また、その失敗を暖かく援助して下さる大人たちの存在にも気がつくなど、彼女らが実社会に飛び出すための素晴らしい序章となった（註14）。

6. 言語表現と非言語表現の観点から

創作オペレッタの活動は、音楽を伴う劇形態の音楽活動であり、様々なジャンルの要素が複雑に機能し合う言語表現と非言語表現の融合された総合活動と考えることが出来る。

一般的に表現といった場合、主に言語を用いてお互いのコミュニケーションを図るための「言語表現」と、コトバという記号に因らない「非言語表現」の二つの方向がある。

西澤昭男は「言語では表現出来ない感情、観念、感覚、思想など、“筆舌に尽くし難い”心情を表すには、非言語表現が適している」と述べているが（註15）、創作オペレッタの様な劇活動は台詞、言葉のついた音楽などの言語性によるストーリー進行と、踊りや動き、表情などを含む所作の他、言葉のつかない音楽、美術を始め、舞台に関するあらゆるジャンルの非言語芸術の総合により表現されるものである。また、西澤は音楽や美術、舞踊や演劇などの様々な表現様式に共通する非言語表現の因子として、①流れ ②動き ③ひろがり の3点を挙げている（註16）。「流れ」は事象が相互に浸透し合う持続のメタファー（暗喩）としてあらゆる非言語表現を支える基礎となり、「動き」はその身体関連と共に、心理的ダイナミズムを生み出す原動力として欠くことの出来ない要素であり、「ひろがり」は未来への志向性において、変容と発展への無限の可能性を暗示しているというのである。

そう考えると、創作オペレッタの活動は、この非言語表現因子の流れ・動き・広がり の3点が言語表現と融合することによって、教育活動として意味を持つということが出来る。

7. 幼児教育学科と歯科衛生士学科との比較から

筆者が創作オペレッタを指導している幼児教育学科と非常勤で教えている歯科衛生士学科において、“歯を大切にしよう”という同一テーマの作品が作られたことを契機に、それぞれの創作に至る経緯や教育目的について比較検討を加えた。なお、幼児教育学科では2007年に創作された作品を例に挙げるが、歯科衛生士学科では毎年歯科に関する創作オペレッタが作られており、それらを総合しての比較である。

幼児教育学科において授業として実施する創作オペレッタの活動については、その教育的意義や成果については既に多くの論文に述べ、有効な教育方法であることを実証してきたが（註17）、現在は卒業研究として地域に出て発表会を持ち、公演終了後、その作品について脚本・演出・音響・衣装・照明・大道具・小道具等のグループに別れ、それぞれの論文に纏めている。そして、学生たちはその成果を卒業研究発表会で発表している。

歯科衛生士学科での創作オペレッタ活動は「音楽」と「保健指導」の共同授業として実施され、創作された作品を保育園で発表し、その後、園児へのブラッシング指導をするという形態を取っている。

2007年度の幼児教育学科の2年生たちは、4月初期の卒業研究の時間から発表したいテーマの検討を始め、1年次から暖めていた候補のうち、子どもたちに最も伝達したい“歯を大切にしよう”という内容に決定し、創作手順についての検討に入った。題名は「きれいのヒミツ」となった。

ここでは以下の7点について両学科の活動を比較検討したい。

① ストーリー作り

幼児教育学科では、まず幼児に何を伝達したいかについて度重なる討議の結果、“歯を大切にしよう”に決定し、さらに、相手の心にしっかり残り、且つ、幼児が飽きずに見てくれる様な作品になる様、メリハリをつけて表

現することになった。

ストーリー作りでは、まず歯に関しての基礎知識を得ることから開始し、書物やインターネットを利用し、歯に付着するバイ菌の詳細を調べ上げ、バイ菌を重要人物として登場させる等、専門ではない素人なりの工夫を凝らした。また、幼児の好む童話「白雪姫」を思わせるストーリー展開もヒントにし、歯についての専門的な展開というよりも、子どもの心に如何に沁み込ませるかをメインにして、オリジナルな話題展開を試みている。

幼児教育学科では通常特別なことが無い限り、幼児の生活全般の学びが中心であるが、虫歯の痛さを経験する幼児も多いことから、身近な問題として選ばれたテーマと言えよう。虫歯菌の名前の人物が登場し、呼び合っているうちに子どもたちもその名前を覚えたが、特に歯に関しては専門的な展開とはならず、虫歯にならないために歯磨きしましょう、というスタンスで話が纏められている。

一方、歯科衛生士学科では、歯科に関して専門的なことを幼児に分かり易く伝達することに焦点が絞られる。また、オリジナルなストーリーというよりは、昔話や漫画等で馴染み易い話を基にして、虫歯菌や歯科衛生士の登場とか、ブラッシングの細かい方法や乳歯の生え変わり、食育との関係、8020運動を推奨する人物が設定される等、かなり専門的なものになっている。

② 作詞・作曲等の音楽

幼児教育学科では、作詞・作曲等の音楽力は必須の能力である。また、創作オペレッタに含まれる諸表現に必要な能力は、幼児教育の場では高ければ高い程良質な指導者になることが予想出来る。作詞では幼児の理解出来る言葉に纏め、作曲では子どもたちの喜びそうなメロディーと伴奏が作られ、パソコンの出来る人の手を借りて音色の豊富なCDに録音されるので、ピアノのない場所でも発表出来る利点がある。

一方、歯科衛生士学科では、作詞・作曲といった専門的な能力が求められている訳ではないが、場の雰囲気を表す非言語表現としての音楽能力は将来的に必要なことも考えられる。しかし、この部分では大変苦労し

ている現実がある。出来る範囲でやるのだが、やり方さえ指導すれば案外素晴らしい作品が出来上がることも多い。

③ 劇表現に必要なその他の表現

幼児教育学科では、劇表現に必要な技術としての舞台構成の様々な能力も必須である。現場ではこの様な能力を持つ指導者が必要とされるが、カリキュラムにそれが組み入れられている養成校は少ないため、本学での創作オペレッタの経験は貴重なものであろう。

一方、歯科衛生士学科でも、相手にこちらの意図を的確に伝達する方法として、劇表現は有効な手法であることを実感して貰っている。それが歯科の専門と直接関係がないことであっても、コミュニケーションツールとしての役割が大きいからである。

④ 発表と観劇対象

幼児教育学科、歯科衛生士学科共、自分たちの伝達したいテーマが相手にどの様に伝わるか、発表の場を想定して創作に工夫を凝らすため、それが彼女たちの様々な成長に繋がっていくことが既に分かっている（註16）。発表は作品の真価が問われる真剣勝負の場になっており、それは、シアター教育の狙いが実証されたものとも言えるだろう。対象を想像しての作品作りの過程には、相手を理解するための涙ぐましい努力が見られる。また、発表でこちら側の意図が相手に理解された時の感動体験は、充実感と今後の自信へと繋がるものと考えられる。

⑤ 地域交流

この実践において、幼児教育学科、歯科衛生士学科共、地域の人々との交流の場が設定されたことは、学生の教育という観点からはかなり意義深いものとなっている。

学生時代に、学内で学習した内容を学外で試す真剣勝負の機会が設定されれば、その後の学びに深さが加わることになるだろう。

⑥ グループ活動

創作オペレッタはグループ活動をその根底に置くため、仲間との協力が欠かせない。そういった意味からは、両学科共、グループで一つの目標に

向けて協力し合った貴重な体験から得られる効果は共通であった。発表終了後の感想からは、学生たちは、達成感や充実感が湧き、苦勞して作り上げた作品が観客に受け入れられ共感を得られたことに手応えを感じ満足し、如何に真剣にこの活動に取り組んだかが明確に読み取れる反応であった。

⑦ 全体を通しての効果

活動した学生が両学科共ほぼ同年齢であること、発表対象が幼児であることが共通点であり、その効果も殆ど同様の結果が得られた。

学生に与えた効果についての第一は、グループ活動の意義についてである。仲間との協力により生まれる達成感・満足感・充実感、個性の認め合い、共に高まり合い何かを生み出す喜び、困難や戸惑いを共に乗り越えた喜び等を挙げ、始めは消極的だった活動も、仲間の意外な発想や様々な能力に刺激されて、何時の間にか真剣にのめり込んで活動出来たという者も多かった。また、リーダーシップの取れない責任者が、仲間の姿を観察することによりその手法を体得したり、他班の活動や過去の先輩の作品に刺激されて頑張れた等、多くのプラス要素が挙げられた。

第二に、子どもたちの発達段階への理解と、真剣で素直な生の反応に対する感動体験が挙げられた。それは、自分たちのこの活動への真剣さが問われたからである。子どもたちの期待感や熱い視線を感じることで、内容に深さや伝達方法の工夫が必要なこと、こちら側の都合で意味の無い空想や嘘を交え、安易に子どもたちに迎合するのは恥ずかしいことを実感し、手を抜いてはいけないことを学んだ。

第三に、表現力の伸長が挙げられる。人前での表現が苦手な者も、子どもの反応に自然な語りかけを誘引され、歌や演技の表現も恥ずかしさを払拭した段階から楽しく自然に出来たという。作詞・作曲、歌唱や他の音楽表現も、難しかったが案外上手に出来、子どもたちにもスムーズに受け入れられたという実感も得られた様だ。

第四に、表現媒体としての音楽や劇の、対象者に与える影響力への理解が挙げられる。相手にテーマを理解して貰いたい時に、言葉だけでなく歌

や音楽に乗せ、劇形態でメッセージを伝達する創作オペレッタの効果を実感したという（註18）。

8. 社会活動に繋がる音楽教育の観点から

Ⅲの③で述べた創作オペレッタ「育児シンフォニー～かがやけ子育て～」および、「ぶどう白書…いつか誰かを愛する君へ…」は、正に社会人の生涯学習の例である。前者は社会人である地域の保健師たちが中心となって自作自演した作品であり、後者は地域における様々な人たちが協同して自作自演した作品である。

しかし、前述した様に、この活動が可能になったのは長野県公衆衛生専門学校で筆者が指導した人たちが核となっていたからである。卒業して様々な社会現場で活躍している人たちが、例えば上記の様に、グループで何かのテーマを相手にメッセージとして送ることになった場合に、学生時代に経験した創作オペレッタを取り上げ、経験者だけでなく地域の人々をも巻き込んで活動出来たことは、生涯学習として有効に機能したものと見えよう。

前述校での創作オペレッタを経験して卒業した者が多くなるに連れ、また、それを観劇した学校関係の教職員が増えれば増える程、現場でそれを生かしているという報告が相次ぐ様になった。そして、現場で実践するに当たっての、筆者への相談例も増えてきた。さらに、当時の教職員が転勤等で県庁始め各地の保健所、看護専門学校等の管理職に就くことが多くなるに連れて、前述の創作オペレッタの評判が広まり、次第に県内の保健関係者に知られる存在になって行った。その結果、前述の「育児シンフォニー～かがやけ子育て～」および、「ぶどう白書…いつか誰かを愛する君へ…」等の出現に繋がったのではないかと推測出来る。

「育児シンフォニー～かがやけ子育て～」は1993年に上演された創作オペレッタで、企画・立案は長野県医務課である。そこに所属するメンバーの中には、創作オペレッタの有効性を認識した前述校の校長・教頭・教務主任等の歴任者が多数いたため実現した活動である。そして、その公演に

関わったメンバーは、保健所・市町村の保健師、前述校の先生方、県医務課の職員、筆者の計19名であった。その内、前述校の卒業生は7割を占めている。内容は、日々の保健師活動の中で出逢った母親や子どもたちの姿を基に、子育てのこと、母親、家族関係等について纏めた55分の作品である。

「ぶどう白書…いつか誰かを愛する君へ…」は1994年に上演された創作オペレッタで、計画・立案したのは前述の「育児シンフォニー」に触発された上田・小島の保健師たちで、関わったメンバーは保健師、役場職員、地域の健康管理委員、短期大学学生、筆者の他、舞台手伝いボランティアを含め総勢30名であった。その中にも前述校の卒業生が含まれ、企画に当たった保健師は後年、前述校の教頭となった。内容は、エイズに感染したと思ひ込んだ青年の心理葛藤を表現したもので、噂話として誤った情報や正しい知識を随所に盛り込んだ約40分の作品である。

以上の例からは、前述校での創作オペレッタの影響が大きいことが分かる。これは、音楽の授業で経験したことが現場へと繋がった明確な結果と見てもよいだろう。

またこれ以外にも、日々の保健師活動での健康教育や衛生教育に生かしている例、養護教諭が学校で生かしている例、学生の実習（学校関係、保健所関係）での報告もある。そして、創作オペレッタを体験した学生たちは、その後、日常の学生たちの交流の場や他科目の授業等にも、音楽を伴う表現活動を効果的に取り入れているという。さらに、卒業式の答辞でも毎年創作オペレッタの楽しかった体験談が披露され、これを伝統にしていって欲しいと結んでいる。この様に、学生時代の体験が現場で何らかの形で生かされるためには、楽しく意味のある活動として深く印象付けられる必要がある。そういった意味においても、創作オペレッタは社会活動に繋がる音楽教育としての可能性を十分に秘めているものと考えられる。

さて、前述校の校長先生が学生の発表観劇後に記述した文があるが（註19）、それは、創作オペレッタ活動の効用を上手く言い表していると思われるので、少々長くなるが原文をそのまま記載し、纏めに替えたい。

「静かな環境の妻科の街並みに、爽やかなハーモニーが流れる。学校の講堂は学生の創作オペレッタ発表の最中である。舞台は新鮮で爽やかな音楽劇の熱演が展開されている。観客席は感激の塙と化している。オペレッタは音楽担当の北村恵子先生が“神秘性と魔力”を持つ音楽の多用化と汎用化を計りたいと考え、当校の授業に採用されている独創的な音楽授業である。“音楽を身近に置き保健師活動等に生かしたい”とする考えと、音楽には“生命力と説得力がある”のですと言う先生の言葉には、納得させられる。観客が多くなれば、学生たちの顔色に創作オペレッタにかける気力と執念が伝わってくる。劇場に早変わりした会場は、不思議な熱気と活力が伝わってくる。拍手・拍手……。拍手が沸く。ユーモアあり涙あり、学生の熱演にシビレながら、時の経つのを忘れて楽しむ。初めての教頭は感激して鑑賞の言葉に詰まり、“素晴らしい、素晴らしい”の連発であった。何れも保健師の社会的役割と使命を強調しつつ、現代社会の病根となっている事象にスポットを当てた作品で、どの幕も涙を抑えることが出来ず、学生の熱演にただただ啞然としてしまった。学生たちも懸命の努力の成果に満足したのか、ヤッターとばかりに笑顔を見せてくれている。夫々個性ある学生が自分の特色を存分に発揮し、チームワーク宜しく総和の美を創出出来る力を創作オペレッタの観劇によって知った。これは大きな収穫であった。取材に来られた女性記者2人も、学生の演技力とパワーに圧倒されて驚嘆していた。オペレッタは内容があり面白い。素晴らしい音楽授業だと思う。「創造・行動・連帯の総合力の成果」がオペレッタの舞台に花を咲かせた。翌日の新聞にオペレッタのことが載った。マス・メディアの宣伝効果は凄い。市町村や関係者から、上演して欲しい、鑑賞したいといった要望や問い合わせが相次ぎ評判となる。感動する素晴らしい出来映えの学生創作の「オペレッタ」。学生間で発表するだけではとっても惜しいと思われてならない。父兄や関係者には是非見て頂きたいと思う。何れそんな機会の実現を考えている。」

V. 創作オペレッタに関する論文について

さて、IVで述べた発表論文に依拠する8つの観点からの記述を含めて、今まで筆者が纏めてきた創作オペレッタに関する著書が5編、論文が21編になり、著書10編、論文41編の全論文の内、ほぼ半数を数えている。その数字は、このテーマが正に筆者のライフワークとして位置づけられることを物語っている。

ここで、今までに創作オペレッタについて論述を加えた内容の確認をするために、関係論文の題名のみ記載したい。

- 著書…
1. 幼児のための創作オペレッタの作り方（単著）
 2. 音楽表現の世界（単著）
 3. 「看護」主体性を育てる看護教育—一般教育の立場から—（共著）
 4. 感性と表現の世界—創作オペレッタ作りを通して—（共著）
 5. 創作オペレッタ活動33年の軌跡とその教育的意義（共著）
- 論文…
1. 創作オペレッタ実践の意義—保育者の資質を高める音楽教育として—
 2. 幼児の創作オペレッタ実践の意義—創造的音楽表現活動としての観点から—
 3. 幼児のオペレッタ作りにおけるドラマ教育的考察
 4. 音楽表現作品発表会について—見る側と見られる側の意識調査より—
 5. 創作オペレッタ「育児シンフォニー～かがやけ子育て～」の—考察
 6. エイズ予防をテーマとした創作オペレッタ公演の—考察
 7. 社会活動に繋がる音楽教育の可能性
 8. 創作オペレッタの構成要素に関する研究 そのⅠ
 9. 創作オペレッタの構成要素に関する研究 そのⅡ
 10. 創作オペレッタの構成要素に関する研究 そのⅢ
 11. 幼児教育における表現活動について—劇ごっこの実態調査を

もとにして—

12. 創作オペレッタ作品「育児シンフォニー～かがやけ子育て～」
13. 幼児の劇表現活動に関する一考察
14. 創作オペレッタ活動の教育的効果について—集団歯科保健指導における媒体づくりから—
15. オペレッタ活動の教育的効果について—小学校低学年における指導の実際から—
16. オペレッタ活動の教育的効果について—小学校高学年における活動から—
17. 創作オペレッタの教材化—“人に見せること”の意味を探る
18. 創作オペレッタ活動の教育的効果について—看護専門学校での実践から—
19. 地域と関わる創作オペレッタ活動の教育的効果—真田町における3年間の創作オペレッタ公演より—
20. 創作オペレッタにおける音楽作りとドラマ性—言語表現と非言語表現の融合—
21. 同一テーマによる創作オペレッタ作りの教育的効果について—幼児教育学科と歯科衛生士学科の作品作りから—

VI. まとめ

今回、創作オペレッタ活動を授業に取り入れてから33年が経過したことを契機に、その軌跡を纏めてみた。その間、幼児教育学科で開始した活動が保健師学科・歯科衛生士学科・看護専門学校での実践へと伝播していったが、何れにおいても高い教育的効果が得られる結果となったことは、筆者にとって誠に喜ばしいことであった。加えて、創作オペレッタ活動を体験した人たちが、社会に出てからもその時の経験を生かして、様々な場面で応用していることは、指導者冥利に尽きるものと言えよう。

開始当初は、あまり理解の得られる活動という訳にはいかなかったが、

最近では、この様な活動を授業に取り入れるところもかなり増え、学会発表や論文にも筆者の論文が引用される様になってきている。

創作オペレッタは総合性を持つ活動故に、教育における様々な要素を包含することが出来る。そのため、義務教育や高等教育のみならず、幼児教育から生涯学習までの、あらゆる場において教育的に意味のある活動になる可能性がある。筆者はこれまで多くの実践をしてきたが、この教育方法について、信念を持って続けてきたことに誇りを持ちたいと思っている。

【註および参考文献】

【註】

1. 創作オペレッタに関してのものは、日本音楽教育学会では5回、日本教材学会では2回、日本保育学会では1回、計7回の学会発表を行っている。
2. 紀要に執筆した論文の送付希望者があったり、図書館への照会が複数回届いたり、2007年の日本保育学会で、筆者の論文を引用して発表した研究者グループもあった。
3. 2003 北村恵子：創作オペレッタ活動の教育的効果について…集団歯科保健指導における媒体作りから… 上田女子短期大学紀要第26号参照。
4. 2004 北村恵子：創作オペレッタ活動の教育的効果について—看護専門学校での実践から— 上田女子短期大学紀要第27号参照。
5. 2003 北村恵子・中村礼子：オペレッタ活動の教育的効果について—小学校低学年における指導から— 上田女子短期大学児童文化研究所「所報」第25号および、2004 北村恵子・中村礼子：オペレッタ活動の教育的効果について—小学校高学年における活動から— 上田女子短期大学児童文化研究所「所報」第26号参照。
6. 1984 北村恵子：創作オペレッタ実践の意義—保育者の資質を高める音楽教育として— 上田女子短期大学紀要第7号および、1988 北村恵子著：幼児のための創作オペレッタの作り方 樹芸書房を参照。
7. 1993 北村恵子：ドラマ教育と創造的音楽学習 上田女子短期大学紀要第16号を参照。
8. 同上論文参照。
9. 1988 小林志郎：ドラマ教育の領域とその可能性 東京学芸大学第四部報告書

I を参照。

10. 1991 北村恵子：幼児のオペレッタ作りにおけるドラマ教育的考察 上田女子短期大学紀要第 14 号および、2001 北村恵子：幼児の劇表現活動に関する一考察 上田女子短期大学児童文化研究所「所報」第 23 号を参照。
11. 1998 北村恵子：幼児教育における表現活動について一劇ごっこの実態調査をもとにして— 上田女子短期大学紀要第 21 号を参照。
12. 註 10 と同じ。
13. 過去に発表済みの、創作オペレッタに関する北村論文 26 編において、その効果が証明されている
14. 2006 北村恵子：地域と関わる創作オペレッタ活動の教育的効果—真田町における 3 年間の創作オペレッタ公演より— 上田女子短期大学紀要第 29 号
15. 2005 西澤昭男：非言語表現の原理と教育的意義 日本教材学会 P5 参照。
16. 註 15 と同じ。
17. 註 13 と同じ。
18. 2008 北村恵子：同一テーマによる創作オペレッタ作りの教育効果について—幼児教育学科学生と歯科衛生士学科学生の作品作りから— 上田女子短期大学児童文化研究所「所報」第 30 号を参照。
19. 1989 三石 宏：学校の四季・学生とともに 長野県公衆衛生専門学校編参照。

【参考文献】

1. 本文 V に記述した、北村恵子執筆の創作オペレッタに関する著書 5 編、論文 21 編を参照。詳細は省略。
2. 2002 西澤昭男・内山澄孝・神原陸男・北村恵子・渡邊亜紀人（共著）：音楽教育の「不易」と「流行」—音楽教師の在り方を求めて— 教育芸術社
3. 2005 北村恵子他 6 人の共著：表現力の育成と教材開発—非言語表現の原理と教育的意義— 日本教材学会